

試合態度

私が中学3年生のときの話です。ソフトテニス部だった私は、福島支部大会で優勝しました。県北地区大会でも優勝しました。そして、会津若松市での県大会に出場することになりました。

あの頃は、今のように他地区の学校との練習試合や大会が盛（さか）んではありませんでした。毎年、県大会に出ているような学校であれば、自分たちのチームのレベルがわかっていたことでしょう。残念（ざんねん）ながら、私の学校は初めて県大会に出るチームでした。

県大会に出ることになったのはいいのですが、自分たちが強いのか弱いのか、県大会のレベルというものがわからなかったのです。それでも、県北大会で優勝できたのだから、そんなに弱くはないだろうと思っていました。

準々決勝まで勝ち進み、次の相手は、いわきの学校でした。1ペア目が、暑さのあまり試合中に体調（たいちょう）を崩（くず）し、負けてしまいました。次が私たちのペアでした。相手は、背が高く体の大きな選手でした。私たちのペアが負ければ、チームの負けが決まってしまいます。

ここでがんばらなければいけなかったのですが、あのときの私は逃（に）げてしまったのです。気持ちで負けてしまったのです。強気で相手に向かっていくことができず、弱気のまま試合を進めてしまいました。さすがに、準々決勝まで勝ち進んでくるチームだけあって、私の小手先（こてさき）のごまかしのテニスでは通用（つうよう）しませんでした。結局、試合には負けてしまいました。

負けた悔（くや）しさと自分のふがいなさで、がっかりしながら福島に帰ろうとしていたところでした。表彰式（ひょうしょうしき）の講評（こうひょう）の中で、私たちの学校が、試合態度（しあいたいど）やマナーがすばらしいチームとして、ほめられたことを知りました。

そのときは、優勝した学校が、福島支部大会2位、県北大会2位の学校だと知って、悔しさが倍増（ばいぞう）していたときでした。「自分たちも優勝できる力はあったのか」という思いが勝（まさ）ってしまい、「講評でほめられても」とふがいない試合をしてしまった自分への憤（いきどお）りがよみがえっていました。

後になってよくよく考えてみると、3位にもなっていないようなチームのことを取り上げてほめてくださった方に対して感謝（かんしゃ）の気持ちが湧（わ）いてきました。自分たちとしては、県大会だからといって特別なことはなく、普通に大会に臨（のぞ）み、試合会場でも普通に行動していただけでした。それを見ていただき、評価してくださったのです。

今思うと、自分たちがすばらしかったのではなく、部活動の顧問の先生の指導がすばらしかったのです。自分たちは、それについていっただけのことです。県大会の大事な一戦で強気になれず気持ちで負けたこと、態度やマナーをほめられたことは、今でも私の中に残っています。そして、顧問の先生への感謝の気持ちが薄（うす）らぐことはありません。

野田中学校の選手の皆さんには、試合会場での態度やマナーで評価されるような人であってほしいと思います。それが私の願（ねが）いです。